

## 論文

# 異端のヒロイン，ジェイン・エア

山口 泰子

### 要 旨

シャーロット・ブロンテの小説『ジェイン・エア』は、19世紀半ばの英国で二つの点で革命的であった。女が意志をもつ人間であることの宣言の書である、という第一点はよく知られているが、もうひとつ、敬虔なキリスト教徒のうちに見え隠れする反キリスト教精神の書であることも見逃すことはできない。その点を解き明かしてみたい。

キーワード： 家父長制度，キリスト教，自然，ムア（荒れ地），ケルト文化，異教文化  
妖精，自由，平等，自立

### 1

シャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816～1855）の『ジェイン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）は革命の書である。『嵐が丘』を書いた妹エミリー・ブロンテと共にシャーロットは英文学世界の突然変異と言ってもおおげさではないだろう。F. R. リーヴィスは『偉大なる伝統』のなかで、ブロンテ姉妹を英文学の伝統の系譜からはずしている<sup>1)</sup>。言うまでもなく、この伝統の太い線上の初めにあって大きな存在といえばジェイン・オースティンをおいてほかにはいない。ブロンテ姉妹はこのオースティンとは異質である。伝統の線には連ならない所以である。従ってオースティンと相容れないものを拾っていくと自ずとブロンテの異質性が窺われ、その異質なものが結局はブロンテの特質ということになるだろう。

ギヤスケル夫人の書いた『シャーロット・ブロンテの生涯』のなかに、シャーロットがG.

H. ルイスに薦められて読んだオースティンの『自負と偏見』についての手紙が引用されている。なぜ『自負と偏見』を評価するのか、とルイスに問い質し、自分は「銀板写真法で撮られたありふれた顔の正確な肖像」を作品のなかに見つただけだと書いている。しかし今後作品を書く場合には忠告に従い「メロドラマ」にならないようにし、オースティンに倣って「更に磨きをかけ、更に抑制するように努め」よう。だが、逆りである想像力によりさらさら書ける時は逆らわないし逆らえない、と文章作法の上ではオースティンとは相容れない姿勢であることをきっぱりと示している<sup>2)</sup>。ここで分かる明白な二人の相違は、オースティンがリアリストならばシャーロット・ブロンテはロマンティシストだということである。距離を置いて冷静に観察することで人間を語ったオースティンに対してシャーロットは作中人物に乗り移って語っている。前者には距離の分だけユーモアが生まれ、厳しい視線のなかに温かさがあふれ出る。後者にあるのはひたすら情熱である。このあたりの事情をヴァージニア・ウルフが次のように指摘しているので、まずウルフのオースティン論に耳傾けてみよう。

「1800年頃、憎しみも恨みも恐れも抗議も説教もせずに、ものを書いていた女性がいた。それこそシェイクスピアがものを書く態度である。(中略)人がシェイクスピアとジェイン・オースティンとを比較するのは、二人の精神があらゆる障害物を燃焼しきっているからなのである。だから私たちはジェイン・オースティンのことを何も知らないのであり、シェイクスピアのことも何も知らない。またこの同じ理由で、ジェイン・オースティンは彼女の書いた言葉の一つ一つに沁み込んでいるし、シェイクスピアもそうなのである。オースティンがその境遇から何らかの意味で被害を受けたとすれば、それは彼女に課せられた生活の狭さであった。当時女は一人では遠くへ出歩けなかったのである。(中略)しかし自分の持っていないものを欲しがらないのが彼女の性質であったようだ<sup>3)</sup>。要するにオースティンの天賦の才と環境とは完全に調和していた、とウルフは説いている。

一方シャーロット・ブロンテは、ウルフがジェイン・オースティンにはないと言った「憎しみ」「恨み」「恐れ」「抗議」「説教」を前面に出し、「持っていないものを欲しがって」いる。ウルフも引き合いに出している『ジェイン・エア』の第12章をみてみよう。

私はあの境界の彼方を見透す力、これまで話には聞いているが、見たことのないにぎやかな世界、生活に満ちあふれる街や地域までも届く視力がほしいと憧れた。それから今よりももっと実体験を積みみたい、私と同類の人たちともっと交わりたい、現在まわりにいる人たちよりもっとさまざまな性格の人々を知りたいと願った。(中略)もっと生き生きとした他の種類のよいものが存在するに違いないと思い、それを見たいと望んだ。

誰が私を責めるだろう。きっと多くの人が責めることだろう。わたしは不満屋だと言われ

## 異端のヒロイン，ジェイン・エア

るだろう。仕方がない。じっとしてられないのは生まれつきで、時には私は苦しいまでに心がかき乱される。

(中略) 人間は活動せずにはいられない。(中略) 女は一般に平静であると思われている。しかし女も男と同じように感じる心を持っている。女だって同じように能力を発揮する必要がある、活動分野を求めている。女があまりに厳しい抑制に苦しんだり何もしないでいることに悩むのは、男性と全く同じなのである。女はプディングを作ったり、靴下を編んだり、ピアノを弾いたり、刺繍したりしていればよいと言うのは、女より多くの特権を認められている男性の了見の狭さから出た言葉である。これまで慣習が決めてきた以上のことを女がしたがったり学びたがったりすると、咎めたり、笑ったりするのは思いやりのないことである。

こうして独りでいる時、私はしばしばグレイス・プールの笑い声を耳にした。

*Jane Eyre* by Charlotte Brontë, Penguin Classics, p.p. 125~126<sup>4)</sup>

ここはフェミニズム宣言として周知の一節だが、ウルフはこのマニフェストそのものには触れず、「この中断はまずい」と言っている。いきなり屋根裏の狂女の付き添いグレイス・プールを持ち出してくるのは唐突だと言うのである。これだけの散文の書ける人が一連の流れを妨げてしまっていると批判的である。平静に書くべきところで怒りに駆られて書いてしまっているのが、文章に「歪みやねじれ」が生じてしまっていると言うのである。作中人物について書くべきところを自分自身について書いてしまっているからだ、と。またその文章作法も男性のそれを模倣しているので充分使いこなせない武器で戦っているようなものだとも言っている。その点、ジェイン・オースティンは「自分が使うのにふさわしい、完全に自然で均整のとれた文章を編みだし、そこから逸れることがなかった」ために「もしかして文才はシャーロットに劣るかもしれないのに」男性の言語ではない自分の言葉ではるかに多くのことを表現し得た、とウルフはオースティンに軍配を挙げている<sup>5)</sup>。

## 2

さて『ジェイン・エア』の革命性に焦点を絞っていこう。英文学の伝統を逸れたということが反逆的だというつもりはなくて、逸れざるを得なかった作家の資質が小さからぬ革命をもたらしたとは言えるだろう、ということで前章ではオースティンの冷静とブロンテの熱情とをまず対比してみた。革命の書などと言うといささかおおげさに響くかもしれない。だが二点からそう言えると思うのでそのことを述べてみたい。

ウルフの引用でも見たように、まず第一に『ジェイン・エア』が女も意志を持った人間であることのマニフェストであるということは誰もが認めるところである。19世紀半ばの家父長制度に縛られた女が自分の意志で結婚を決めるということはまさに革命的であった。

なるほど『自負と偏見』のエリザベスも夫を自分の意志で選んでいる。だがオースティンの世界では貴族と平民の違いはあっても両性はいずれも紳士階級に属していて身分は対等である。物語をみてみよう。エリザベスに対して『ジェイン・エア』の主人公ジェインは孤児で財産もなく、夫になる人ロチェスター氏の養女の家庭教師、つまり使用人である。だが自身の才覚で主人の愛を勝ち取る。というわけで俗に言う玉の輿に乗るところを、或いはシンデレラ物語で終わるところを、ロチェスター氏には屋根裏に狂人の妻がいることが分かり結婚は成立せずジェインは館を出る。第27章の終わりの部分でそのことは語られる。ここで終われば悲恋の少女小説のレッテルを貼られて忘れさらられてしまったであろう。ところが作品は第38章まで続き、ロチェスター氏の「茨野館」(Thornfield Hall)を出たジェインは荒野(moor)を彷徨ううちに偶然従兄妹たちに救われ、やがて叔父の遺産も入り経済的にも自立する。宣教師としてインドに行く決意の従兄セント・ジョン・リブアーズに結婚を申し込まれるが、その時「ジェイン、ジェイン、ジェイン」と三度呼ぶ声に答えて館に戻り、狂った妻の放火で焼け落ちた館の下敷きになり左腕を失い盲目になったロチェスター氏に再会し結婚する。今度はジェインには財産があり、夫の片腕であり眼であるので対等の立場ということで。「あなたが自由で人に与えたり保護したりする役しか引き受けなかった時分よりも、ずっと愛しがいがあります(p.494)」と彼女が言う時、主人公以上に作者の誇らしげな顔が覗く。男の作家ならまず持たせない矜持をヒロインに与えているのである。前半のみの展開ならば受け身の愛で終わるところを更に紆余曲折を経て対等な結婚の形にしたのはひとえにこの主張のためである。

このようにヴィクトリア朝の家父長制度批判が『ジェイン・エア』の主題である。ジェインにとってロチェスター氏はもはや主人(master)ではない。「私が私の主人」(my own mistress)なのである。ヒロインは身体も小さく美人でもない。あるのは眼の輝きと不屈の精神と慈善学校で受けた教育とそこでの教師の経験だけ。だが男勝りの知性と強い意志と勇気とで女が自ら選ぶ結婚話。保守的で「お上品な時代」と言われた19世紀には受け入れられない、これは反逆の書なのである。

### 3

しかしこの第一主題だけであったのなら『ジェイン・エア』はウルフが惜しむように金切り声で叫び立てる憤怒の書で終わったことだろう。しかし『ジェイン・エア』にはそれだけでは片づけられない魅力があって今日まで我々読者を虜にしてきたのだ。それは一体何なのであろうか。もう一度ウルフの言葉を聞こう。

小説は本来実人生に即しているものなので、小説の価値は実人生の価値ということにな

る、とウルフは言う。女性の価値観は男性の価値観と異なる部分があって、戦争を描いているからこの作品は重要な作品（例えば『戦争と平和』）で、客間の女性たちの感情を扱っているからつまらない作品（『自負と偏見』）だということにはならないはずだと。だが19世紀前半の小説は、書き手が女性の場合本筋から逸れ、外なる権威に服して変えざるをえなかった。「攻撃の手を使っているかと思うと、懐柔の手を使ってものを言ったりしている。自分が女にすぎないことを認めているかと思うと、男にひけをとらないと言って抗議している。気質の命ずるままに批判に立ち向かっているのです、素直に応ずるかと思うと、怒って力説することもある。（中略）家父長制社会のまっただ中で、あれほどの批判に面と向かって、自分が見たままのものを瘻むことなく固守するにはどれほど優れた才能、どれほど真摯な誠実さを必要としたことか。ジェイン・オースティンだけが、それにエミリ・ブロンテもそれができた。彼女たちは男性が書くようではなく女性が書くように書いたのである」<sup>6)</sup>。テリー・イーグルトンもエミリとシャーロットの大きな違いとして、シャーロットが道徳的因習に抵触しないで描こうとしたため矛盾にみちてしまったことを挙げ、当時の暗黙のうちに縛りつけてくる制約ゆえの歪曲について指摘している<sup>7)</sup>。作家たち、とりわけ女の作家たちはどれほど書きにくかったことだろう。出来上がりが矛盾だらけなのは当然といえば当然である。従って我々は『ジェイン・エア』がこのような制約の下に書かれた書であることを忘れてはならない。

このような時代的制約下にあって革命的と思われるもう一点について考えてみよう。注目したいのは全編を覆うキリスト教精神である。だがもっと気になるのはそれとほぼ同程度に活写されている自然であり、点在する超自然現象である。キリスト教と自然礼讃はいわばヒロインの主義と性癖を代弁して対立に向かうところを、時代の制約により歪められ矛盾を孕んだまま提示されているかに一見みえる。ところが巧妙にオプラートをかぶってはいるが、作者が実はキリスト者ではなくて、自然の子であることは透けて見えている。主義は言うまでもなくキリスト教主義である。ところがジェインは気質的には激情家であり、ある意味で野心家とも言える。この構図はよく見るとロチェスター氏にも当てはまる。そしてもっとよく見ると、後述する従兄セント・ジョンにさえ符合するのである。またキリスト教は理性と結びつき、自然は感情と繋がって、前者は寒色系、後者は暖色系で語られる。伝導者になる従兄は冷たい氷のイメージで表わされ、ジェインが伯母に閉じ込められ最初の反抗を示した部屋は赤い部屋である。ここでの反逆がジェイン・エアの反旗を掲げる原点になっていることは言うまでもない。

当時のイギリスではキリスト教が遍在していた。誰もがキリスト教徒だったのである。作者もヒロインも神に祈り、神を呪ったロチェスター氏でさえジェインとの再会を喜び神に感謝している。従兄は狂信的に神に帰依し宣教師の道を命を賭して全うしようとする。

だが自然、とりわけムアも大きな役割を果たしている。作品全編にはキリスト教の神への言及、聖書の言葉からの引用がおびただしいが自然への言及もそれに劣らず多いことに気づかされる。ヒロインの隠された異端性は、この自然の子であるという資質から生じていることは間違いない。以下作品に沿って、自然、超自然の果たしている作用を拾い挙げてみよう。とりわけ自然対キリスト教の構図を、ジェイン対セント・ジョンに見ていこう。

自然はまず慰めを与え、同時に叱咤激励する役を果たす。月を孤児ジェインは母だと思っている。重婚の事実を知って館を出るその時を決めるのは月である。

私は月の出るのを見守っていた——なにか運命の言葉が、その丸い表面に書いてあるかのような不思議な期待をもって見守っていた。月は、これまで見たこともないような現れかたで雲を破って出てきた。まず一本の手が黒雲の層へ差し込まれ、それをはらいのけた。それから月ではなく白い人間の姿が、輝かしい額を地上に向けて蒼穹に輝いた。それはじっと私を見つめ、私の魂に話しかけた。その声は、はかりしれぬほど遠くから響いて来たにもかかわらずすぐ近くのように私の心にささやきかけた——

「娘よ、誘惑から逃れなさい」

「お母さま、お言葉に従います」(p.358)

こうして館を出たジェインは一文無しでさまよい、ヒースの荒野に宿を借る。

私はヒースに触れた。それは乾いていてまだ日中の温みが残っていた。空は晴れていて星が一つそこに優しく輝き、自然は私に好意を持っているようだった。(中略)私とその自然の子(I was her child)であるならば今晚はその客になってもいいのではないかと思い、自然(my mother)は宿泊料を求めたりしなかった。(p.363)

ここには自然の恵みもある。ジェインは熟れた苔ももをとって食の足しにする。「激しい空腹が、充分ではないにしてもこの仙人の食べ物でなだめられる」のである。月、荒野＝自然＝母と理解したい。

超自然的現象は神秘的である。「ジェイン、ジェイン、ジェイン」と叫ぶ声は何マイルも離れたジェインに聞こえ、「行きます。どこにいらっしゃるのですか」という返事がロチェスター氏に聞こえたという超自然的クライマックスは数多ある異教的要素の中でも見逃すことはできない。この神秘的な出来事は以下のような状況下で発生する。先にも触れたよ

## 異端のヒロイン，ジェイン・エア

うに、布教のための伴侶としてジェインをインドに連れていくために結婚を申し込むセント・ジョンの愛というものに対して、ジェインはそれは「偽りの愛」で「その感情もそういう愛の考え方をするあなたも軽蔑する」とセント・ジョンにきっぱりと対峙する (p. 454)。それに対するセント・ジョンの反応はこうである。

あなたの拒否するのが私ではなくて神だということを忘れないでください。神は私によってあなたに尊い仕事を与えようとしていて、あなたは私の妻になることによってしかその仕事をする事ができないのです。それを承知なさらなければ、あなたは自分本位の安楽と空しい無名の境遇に自分を追いやることとなります。あなたは信仰に背くことになり、異端者よりも憎むべきものになることを怖れなさい。(p. 455)

この専横ぶりはどうだろう。ほとんど神の声に等しいこの言葉がジェインの精神の自由を金縛りにする悪魔の声に響くのはどうしてなのか。だがジェインはセント・ジョンにあなたは私を殺そうとしていると抗いながらも、自分が結婚することが「神の意志であることを確信することができれば」と応えてしまう。ジェインはこの時「私はもう愛のことは考えていなくて、ただ義務ということが頭にあった」と言っている (p. 466)。この文脈からはセント・ジョン＝キリスト教＝義務という図式が描けることが分かる。

この時なのである。「ジェイン，ジェイン，ジェイン」と三呼ぶ声が聞こえ、ジェインがセント・ジョンの呪縛から解き放たれるのは。それはセント・ジョンの愛が本物ではなくて、ジェインの承諾も義務観からであることの、言葉を変えれば、ジェインは神よりも自分の感情の方を信じていることの証である。

家じゅうが静かで、セント・ジョンと私のほかはみな寝てしまっているようだった。すでにろうそくは消えかけていて月光が部屋に満ち、胸の動悸が聞こえる思いしていると急に何かを期待する感じでそれが一時止まり、その期待が私の体中に広がっていった。それは体に電気が通るのとは違ったものだったが、それと同じ位激しくて異様なもので、感覚をそれまでになかったぐあいに目覚めさせた。それがいっせいに待機し、眼と耳が緊張し、私の体の骨についている肉まで震えた。(p. 466)

そしてジェインは自分が「よく知っていて愛している」エドワード・ロチェスターの苦痛に訴える声を聞く。

マーシュ・グレン谷の向こうの丘にそれが俯して微かに返ってきた。「どこにいらっしゃるのですか」。私は耳を澄ました。樅の木が風にそよぎ荒れ野 (moorland) の孤独と真夜中の沈黙があるだけだった。

「迷信なんかじゃない」と、私は門のところの黒々と生えている櫟のそばで思った。「これはそなたの誑かしでも妖術でもなんでもない。これは自然がそうする必要があって精一杯やったことなのだ」(p.467)

これでもう明白であろう。先の等式に対して、この一節からエドワード・ロチェスター＝自然＝本物の愛、という等式が成り立つ。そしてくりかえすがジェインこそ自然の子であり、彼女の偽らざる感情は神の命令に背いても、自然に帰属するのだ。

ロチェスター氏は初めからジェインを「妖精」だと思っている。彼も美男ではなく「粗削りの花崗岩のような顔」と大きな眼をした「荒々しい血統」の末裔である。彼の館には幽霊がいると噂されている(p.149 & p.121)。ケルト的要素と北欧神話的要素—迷信、予感、前兆を信じる精神が主人公たちの並外れた知性とクリスチャニズムをこごとというところで凌駕しているのだ。ジェインのロチェスター氏との最初の出会いはその好例である。

その音は道を伝ってきて、道が曲がりくねっているのでまだ見えないが馬が近づいて来ていたのだ。 (中略) 私はまだそのころは若くて暗いのも明るいのも多彩な幻影が私の精神に宿り、子供部屋で聞いたお伽噺に出てくることなども頭のどこかに残っていて、それが浮かんでくると年とともに活発になってきた想像力がそういうものを子供に望めないくらい迫力があるものに仕立てた。私は蹄の音が近づいてきて、夕闇の中に馬が見えるのを待っているうちに、ベッシーがしてくれたある話を思い出していた。それは「ガイトラッシュ」という北部イングランドの妖精の話で、馬か騾馬かあるいは大きな犬の形をして寂しい道に現れ、どうかすると夜道を急ぐ旅人に襲いかかることもあるというのだ。 (p.128)

だが実際に現れたのは人を乗せた馬と大きな犬であった。妖精は決して人間の形はとらないのだからお伽噺の世界に親しく空想力豊かである一方、知的で冷静なジェインは、この不思議な現れ方をしたロチェスター氏と犬と馬を妖精ではなく、この世のものとして認識する。だが、この時馬が氷に滑って怪我をした氏の方は理由もないのに妖精物語が頭に浮かんで、ジェインが妖精で馬に何かしたのだと思う。

「あなたはあすこの柵に腰掛けて仲間を待っていたのでしょうか」

「仲間って誰ですか」

「緑色の服を着た妖精たちですよ。ちょうどそういう月夜の晩でした。あなたがあの道に張らした氷のリングをどこか私がかわしはしませんでしたか」

私は首を振った。「その緑色の服を着た妖精たちは、もう百年も前からイングランドからいなくなりました (後略)」(P.139)

妖精はもういない，とジェインの理性が答えても，彼女の血肉や魂の奥深いところにはキリスト教によって小さな妖精に姿を変えられ，今では市民権を失った古代の神々が住んでいる。彼女の理性が，そして時代がクリスチャンにさせているのであって，彼女の心の奥深くを探れば彼女は自然崇拜者即ち汎神論者と言う方が似つかわしい。こんな件もある。慈善学校を了えそこの教師をしながらジェインは外の世界に出たいと思っている。ついながらこの野望は後述するセント・ジョンの野望と呼応する。どうしたらこちら側の「牢屋」から谷間の「白い道」を辿ってずっと遠くまで行けるだろうかと思えばぐねていると「親切な妖精か何かは私の探していたことを枕の上に落としていった」かのように，ジェインは新聞に家庭教師の広告を出すことを思いつくのである (p. 101)。

超自然的現象が重要な役割を果たす例をさらに付け加えておこう。なかにはおどろおどろしいものもあり，それは作品を一部ゴシック小説風にもしている。自然が背景としての自然だけではなく超自然的にも作用しているのである。自然はもともと公平なので，その役割は両義的である。ロチェスター氏との愛が深まっていったある日，二人が果樹園を歩いていてジェインが自分が美しくて財産もあり身分も高ければ「私たちは神の前で平等」だと言ったのに対して，氏は「そう，平等だ」「私と対等 (my equal) で私に似たもの (my likeness) がここにいる」と言い，ジェインは「あなたの顔にかいてあることが読みたいから月の方を向いてください」と言う (p.p. 285～6)。それで彼女は氏の本意を納得し結婚を決意する。ここでも月が役割を演じている。それは真実を写す鏡の役割である。だがこの喜ばしいクライマックスの最中に不穏な嵐の兆しが訪れる。

その夜に何か不幸がふりかかったのだろうか。月はまだ空にあったが私たちがいるところは影になっていて私のすぐそばにいる私の主人の顔が見えないくらいだった。そして栗の木はどうしたのか身悶えし，呻き，風が月桂樹の並木を通過して私たちの方に凄まじい音をたてて吹いてきた。(p. 287)

翌日この木は雷に打たれて二つに裂けてしまったと知らされる。ここには二重婚に対する自然の怒りが読み取れる。またそれを何かの前兆と見て感応するジェインがいる。もちろんこの時彼女は重婚が行なわれようとしているなどということはゆめ知らない。ただし重婚に対する自然の罰とみるのはキリスト教的反応であって，むしろ屋根裏の狂女，ロチェスター氏の正妻バーサの怒りとみたらまったく違った自然の解釈がなりたつのではないだろうか。自然の優しさと厳しさ，善と悪とみる観方はあくまで倫理的観方である。先にも言ったように自然は不変で，普遍でもあり，常に公平中立なのである。話を戻そう。今，

落雷をバーサの怒りとみた。それが証拠に、結婚の前夜バーサが、何も知らないジェインのところに現れて、花嫁衣装のヴェールを引き裂く件りにも「暗くなるのに従っていつもと違うもの悲しい風が吹いて」きている。ジェインはその女は吸血鬼を思わせたと述べている (p. 314)。木もヴェールも引き裂かれたという符合。この時の風は先の嵐と呼応して、バーサの怨念を象徴しているのである。決してキリスト教的倫理観で作者は書いてはいないことが分かる。『屋根裏の狂女』で著者はこのビルドゥングスロマン『ジェイン・エア』を神話的コースを辿るヒロインの話として読み込むなかで、バーサは実はジェインの分身で自己の満たされぬ思いとそこから発する怒りを表わし、茨野館に幽閉されている方のもうひとりの自己とみて、ジェインは「憤怒のデーモンと正面から向き合」わねばならないと言っている<sup>8)</sup>。正鵠を射た観方であると思う。

従兄のセント・ジョンにとっては自然はどういう働きをしているのだろうか。彼の二人の姉妹たちにとって自然は無限の喜びの源泉であるが、彼はあたりの野原を支配する沈黙や、美しい眺めを楽しむためだけに歩き回るといふことは決してない。仕事には非のうちどころもないほど熱心だが、それでいて内的な安定を得ているようには見受けられない。彼の説教を聞いてジェインは次のように感じる。

厳しく押さえられた何ものかがやがてその声に伝えられて言葉に生気を与え、抑制されたままその力が増していった。それを聞いていると彼の雄弁に心は掻き立てられ、精神は驚かされたが、心も精神も和らげられなくてある不思議な苦渋が全体を貫き、そこには人を慰めてくれるものがなかった。(p.p. 393-4)

キリスト教のなかでも寛大といわれる英国国教会の牧師であるはずのセント・ジョンの厳しいカルヴィン風の教義は「有罪の宣告」のように響き、説教の後で前よりいい人間になったように感じて安心するというよりは、悲しい気持になるとジェインは感じている。彼女には「彼の雄弁が悩ましい衝動や満たされない欲望や安定を欠いた抱負がひしめいている失望の深みから生まれたもの」に思われ、これほど立派な人間でありながら「まだ『人知ではとうてい測り知ることのできない神の平和』<sup>9)</sup>を得ていない」と思われる。そしてその点では自分と同じだと彼女は感じるのである (p. 394)。

なぜ彼が「神の平和」を得ていないか、という問に対して、作家は二つの答えを読者に与えている。第一に、彼はオリヴァー嬢への愛を押し殺し忍耐と克己の道を歩もうとしていて、それはほとんど狂気に近い。だがそれは熱病のような情熱と飽くことを知らない好奇心の所産であるという矛盾を孕む。実は小さな村の教区の牧師では満足できないのだから

ら。そしてそれが第二の理由である。彼自身が語っている。牧師になったのは間違いだったと。もっと世俗的な活動，著述家，芸術家，政治家，軍人の仕事に惹かれ，「牧師の白衣の下に野心を隠しているように思った」のだが，その時神の使命により，軍人や政治家にも必要な知力，勇気，雄弁を駆使する宣教師の仕事を与えられた，と (p.p.404～5)。自ら告白するようにセイント・ジョンは野心家である。その彼がジェインに向かって彼女も野心家であると言う。確かに二人には似たところがある。ジェインとロチェスター氏が似たもの同士であるというのとは違う意味で。だがベクトルが違う。セイント・ジョンの情熱は己を殺す方向に向けられ，ジェインのは活かす方に向かうのだ。現に作品の最後はセイント・ジョンがインドでの過酷な宣教活動の挙げ句，間もなく神に召されることを報告して閉じられる。この件りは韜晦である。作者はこの殉教者を讃美しているのかどうかという問題が残るのである。そして一見そのようにとれるだろう。時代がそれを要求しているのだから。先述のようにこの時代の制約の下ではそうだろう。彼は神話の英雄が艱難辛苦の果てに辿り着く神の玉座に今昇ろうとしているのだ。彼の野心は確かに満たされた。だが巧妙に被せられた時代のオブラートの下ではセイント・ジョンはやはり敗北者である。ジェインのように地上での愛を得ることができていない。これからもないだろう，と作者はジェインに語らせる。神の別世界よりもこの世のただなかにあることを欲したジェイン＝シャーロット・ブロンテはこのような栄冠は望まないはずである。慈善学校の子供時代「人に好かれなければ死んでしまった方がいい」と言うジェインにヘレンは言う「あなたは人間に好かれることを考えすぎる。あなたは感情に走りやすくて，あなたを作った神があなた自身という無力なものや，あなたと同じくらい無力なほかの人間以外に頼りになるものを与えてくださったことを忘れていて。この世とこの世に住む人間のほかに別世界と魂の王国があって，私たちを見守っていてくれる」と。しかしジェインにはヘレンが伝えた「平和な気分には何か言いようのない悲しみが混じっている」ように思われる (p.p. 81～2)。これはセイント・ジョンの説教を聞いた時の感じと通底する。セイント・ジョンは殉教というヒロイックな道を辿ることで彼の野心をなだめ，彼の名「使徒ヨハネ」が暗示するように彼は今，聖人に列せられようとしている。彼は39歳の若さで死んでいくのだ。この時代ゆえにそれは表向きは殉教であり，そして作者もそれを讃美していよう。だが作者の深層心理のなかでは，神には受け入れられても，インドの過酷な自然に罰せられたと思われると解釈することもできるだろう。それに対してジェインはこの世の天国を選んだ。彼女は今，森に深く包まれたマナー・ハウス「羊歯の谷間荘」(Ferndean) でエドワード・ロチェスターと幸せに暮らしている。『屋根裏の狂女』でも羊歯の谷間荘は‘natural paradise’であると解釈されている<sup>10)</sup>。ただしこのマナー・ハウスはあまりに寂しすぎて狂人のバーサの幽閉所としても選ぶに忍びなかったほどのほとんど隠遁所である。冒険的な自由恋愛

者が住まうことのできるここがぎりぎりの線だということだろうか。シャーロットの同時代作家ジョージ・エリオットが、前出の、妻ある評論家G. H. ルイスとロンドンの郊外セント・ジョンズウッドに半ば身を隠して同棲生活を営み、彼女の方からは人を招かない、と言ったことが想起される。相手にこういう日陰者とつきあう者というレッテルを貼ることを遠慮したからである。結局ジェインも自然の子であると同時に時代の子だということだろうか。この羊歯の谷間荘は、人の手で創られた、花々の咲く美しい庭園のなかに建つ館ではなく、鬱蒼とした緑の木立ちに囲まれ、周囲から隔絶され、古びた緑色の壁が陰気な別荘である。だがそれは緑色の服を着た妖精たちが「魔法にかかったように共にいる (p. 486)」のにふさわしい棲み処ではあるまいか。そしてまた、その肥沃な緑の森の自然に癒されてロチェスター氏の眼も視力を取り戻していくのである。同じ気質のセント・ジョンとジェインの岐れ道は、天国を選ぶか地上を選ぶか、キリスト教か自然信仰かにあるといえるだろう。そしてセント・ジョンはパーサがそうであるなら、ジェインのもう一人の分身と読んでもいいだろう。

オリヴァー嬢への愛のことが後になってしまった。ジェインはセント・ジョンのロザマンド・オリヴァーに対する激しい愛とその抑制を目撃する。彼女が現れると、いつもは大理石の彫刻か氷柱のような彼の「眼が急に輝きを増してどうにもならない感情で動揺するのが見え、(中略)それは意志の圧制に飽きた彼の心がそうすることで一挙に自由を取り戻そうとしているよう」なのだが彼は「騎手が暴れる馬の手綱を引き締めるのと同じ具合にこの動きをおさえつけ」るのである (p.407)。彼に言わせればこの動揺は「愚劣」で「軽蔑すべき弱点」で、「たんに肉体の反応であって魂の奮えではない」ということである。そして「その魂は荒海の底に横たわる巖のように不動」で「自分がそういう冷酷な人間であることを承知してほしい」と言うのである (p.418)。ここでもセント・ジョンに形は違いがジェインと同じ意志と強情と情熱があることが分かる。そしてまたもやその反応は両極に分かれ、彼はそれらを押さえる方向に、彼女は解放する方向に向かおうとするのだ。

最後にもう一度セント・ジョンの偽りない自然観を探ろう。先述したように、彼は自分は「神の僕」と言い、自然には興味を示さないように見受けられた。だがそれはみせかけで、峠を見上げ谷間を見下ろして、「ガンジスの岸に寝てまたこの景色を夢に見るだろう」と言いながら「彼はあたりの山の精と話し合っているように見え、その眼は何かに別れを告げていた」のである (p.447)。彼でさえ本来は妖精の国の人であることが分かる。

#### 4

ブロンテ姉妹の父は英国国教会の牧師ながらアイルランド出身。姉妹が幼い頃に亡く

## 異端のヒロイン，ジェイン・エア

なった母の代わりに一家の世話をしてくれた叔母は厳格なメソジストだが、母ともどもコンウォールの出身。いずれもケルト的風土の地である。姉妹はこの叔母から子供の頃お伽噺を聞かされて育ったという。ジェインがはじめてロチェスター氏に出会う夕暮れの散歩道で氏の馬を妖精だと思うのは子供の頃のベッシーの話に基づいていた。この件りは作家自身の経験が作品に投影された好例であろう。

このケルト的背景に加えて、姉妹の育ったイングランド東北部のヒースしか生えない荒地（ムア）の影響には大きなものがありそうだ。姉妹は自分たちを育んだヨークシャーのハウースの自然に愛着を感じていた。とりわけ絶えず吹きすさんでいる風は大きな因子であった。作品のなかでも風が通奏低音のように鳴っている。「北部は暗く冷たく平坦ではないけれど北欧の種族の根強い力強さがまだこのあたりに残っていて、『ジェイン・エア』の人物の中に輝き出ている」<sup>11)</sup>とギヤスケル夫人が書いている。そしてこの土地の人々は孤立した高冷地の故か、誰もが独立独行で隣人の助けを得ようとせず、自尊心高く生気にあふれているという。神に頼るよりも自分を鍛える種族とでも言おうか。この精神こそジェインの精神である。自由と平等、今ではいささか手垢がついてそれほど眩しい権利ではないかもしれないが、この権利を獲得するためにはジェインは神をも畏れず、神にも背いて古代の神話のヒロインの道を巡ったことになる。彼女の勇氣、彼女の自立心、彼女の知性、それはヒースの荒野の産物である。その強烈な個性と、飽くなき好奇心、勇氣と抵抗に出会う時、人は清新な解放感を覚える。ジェインの生き生きとした魅力はそこにある。作者も気づかぬうちに神からも自立した異端のヒロインが創造されたのも不思議ではない。

## 註

- 1) *The Great Tradition* by F. R. Leavis, 1948, Pelican Book, p. 9
- 2) *The Life of Charlotte Brontë in Life and Works of the Sisters Brontë* by Mrs. Gaskell, 1857, AMS Press, New York, p. 360
- 3) *A Room of One's Own* by Virginia Woolf, 1928, Penguin Modern Classics., p.p. 68~9
- 4) 以下 *Jane Eyre* からの引用はすべて頁のみ記す。傍点は筆者による。
- 5) *A Room of One's Own*, p. 77
- 6) op. cit., p.p. 74~5
- 7) 『テリー・イーグルトンのブロンテ三姉妹』 (*Myths of Power: A Marxist Study of the Brontës* by Terry Eagleton, 1975, Macmillan Press) 大橋洋一訳、晶文社、60頁
- 8) *The Madwoman in the Attic* by Sandra M. Gilbert & Susan Gubar, 1979, Yale University Press, p. 347
- 9) 新約聖書「ピリピ人への手紙」第4章 第7節
- 10) *The Madwoman in the Attic*, p. 370
- 11) *The Life of Charlotte Brontë*, p.p. 348~9